

考察
酸素負債に関する考察
低強度、高強度それぞれの酸素摂取量とパワーの比較に見られる、酸素摂取量の減少時の傾向の違いについて考察する。
高強度にのみ現れている負荷漸減中の酸素摂取量の増加（図??）は、15分時点までの負荷漸増に対応するために発生した。
また、増加に比べてゆるやかに減少していく変化の傾向は、高強度における酸素摂取量と心拍数の比較（図??）における酸素摂取量のピーク位置に関する考察
低強度と高強度における酸素摂取量の比較（図??）より、低強度、高強度いずれの場合においても、酸素摂取量の最大値はほぼ等しい。
流量計の改善
流量計の不安定さ
酸素摂取量の変化は大部分で換気量に追従するが、今回使用した流量計が出力する流量が不安定であることがこれらの結果から確認された。
タービン式水流計の校正方法
流量計は本来、時間あたりの容量をタービンが回転した際に出力するパルスの数で測定するために設計されている。今回使用した流量計をそのまま使用する場合、最も良い校正方法は一定流量で空気を流し続ける装置を使って、時間あたりの流量を測定し、パルス数と流量の関係を求める方法である。
実際にはこのような装置を用意するのは難しいので、今回の校正方法を改善する形で、今回使用した 300mL のシリンダーを用いて校正を行った。
タービン式水流計の校正方法
今回流量計として使用した水流系は、測定値が不安定であることや、流路抵抗の大きさなど多数の問題が存在する。この問題を解決するために、大きな流路径（直径 35mm 以上が望ましい）を持つ、使用状況に左右されずにいつも安定した測定値を出力する、取付角度に制限を受けない、最大作業の測定
今回の装置は、センサーの使用や性能の問題から、最大作業時の呼吸代謝の測定は想定しないこととして製作した。したがって、二酸化炭素濃度の測定範囲
今回使用した二酸化炭素センサーは入手可能なものの中から最も測定範囲が広いものを選んだとはいえ、最大 4% の測定範囲であるため、実際の測定値は測定範囲の上限に近づくにつれて精度が低下する可能性がある。
流路抵抗の大きさ
実験中、低強度、高強度のいずれの場合でも、設定パワーが 110W を超えたあたりから、マスク越しには思う存分に呼吸することができず、酸素センサーの使い勝手
今回の装置では、通常なら 1 万円程度のセンサーの代わりに、酸素センサーとして空気亜鉛電池を酸素センサーとして使用したが、また、空気亜鉛電池は容量が小さく寿命が短いため測定ごとに可変抵抗を調整して校正を行う必要があったが、デジタル表示のオープンソースハードウェア化
今回の装置は、ソフトウェアのコード、3D プリント部品のデータをオープンソースで公開することで、オープンソース化を実現した。
現時点では測定精度や性能面での問題があり公開には至っていない。近いうちに流量計の改善と測定範囲の広い二酸化炭素センサーの導入、ソフトウェアの改善
個人設定の書き込み方法の変更
体重あたりの酸素摂取量を求める際に重要な体重は、今回のプログラムでは Arduino スケッチ内に定数として書き込んでいるが、画面表示項目の追加
測定中に画面に表示する項目は、現時点では Arduino スケッチに書き込んでいるため、変更にはプログラムを変更する必要がある。
データ記録方法の変更
現時点で装置が測定したデータは 1 秒間隔の全ての値は Micro SD カードに書き込み、1 分間隔のデータを Ambient 温度と湿度に記録している。